

門的である。また単なる学説の紹介ではなく、生き方・宗教の問題として捉えている点が特徴である。

③ また、太田久紀「仏教の深層心理」(有斐閣演書)も、ひじょうにわかりやすい。

④ 同「凡夫が凡夫に呼びかける唯識」(大法論閣)は、内容は同じくらいわかりやすく、より詳細である。

⑤ また、服部正明・上山春平「認識と超越〈唯識〉」(仏教の思想)、角川書店は、特に仏教史のなかでの唯識の位置づけがよくわかり、手頃である。

⑥ もう少し詳しく知りたくなった人には、横山紘一「唯識とは何か」(春秋社)をお薦めしたい。鎌倉時代の唯識学者、良遍が母のために書いた和文の手紙の唯識入門「法相二巻抄」を解説したもので、ポリュームもあり本格的だが、比較的平易でもある。

⑦ また、竹村牧男「唯識の構造」(春秋社)は、唯識思想の現代的意味を解説している。

⑧ 「三十頌」の講説としては、太田久紀「唯識三十頌要講」(中山書房)がわかりやすい。

テキスト

① 解説を含んだテキストの翻訳として、三枝充憲「ヴァスバンドウ」(人類の知的遺産目録、講談社)がある。

② また、「大乘仏典15 世親論集」(中央公論社)には、唯識の基本的古典「唯識二十論」「唯識三十論」

「中辺分別論」などが含まれており、必携の書である。

③ あとは、もっとも本格的なものとして、因訳一切経の「撰大乘論釈」(瑜伽部八、世親釈文註訳、無性釈文註訳)、「瑜伽部九、世親釈、真諦訳」、大東出版社、特に真諦訳)に取りかかるとよい。長尾雅人「撰大乘論 和

訳と注解 上、下」(講談社)、宇井伯寿「撰大乘論研究」(岩波書店)が参考になる。一度であきらめず、我慢して三度くらい読むと全体像が見えてくるだろう。

④ また、いうまでもなく「成唯識論」(国訳一切経、大東出版社)は、必読の基本的古典である。

*本書刊行後に、筆者の理解するラインでの唯識学を学ぶコースとして、以下のようなテキストを整備した。順に学んでいくと、次第に理解を深めていただけれると思う。

- ① 「わかる唯識」(水書坊)、もつともわかりやすい唯識の入門書。
- ② 「唯識で自分を変える」(ナギ出版)、唯識を日常生活に活かすための実践的入門。
- ③ 「唯識のすすめ——仏教の深層心理学入門」(NHKライブラリー)、唯識の全体像と現代的な意味を明らかにし、西洋の深層心理学、トランスパーソナル心理学との比較と習合についても語る。中級編。
- ④ 「能と唯識」(晋土社)、観阿弥・世阿弥の能と唯識の深い関わりを明らかにする。唯識が思いがけないところで日本の伝統文化に深い影響を与えてきたことがわかる。中級サブ・テキスト。
- ⑤ 「大乘仏教の深層心理学——撰大乘論を読む」(晋土社)、代表的古典の概説紹介。中級の上編。
- ⑥ 「撰大乘論 現代語訳」(コスモス・ライブラリー刊、星雲社発売)、代表的古典の現代語訳。

新装版へのあとがき

人間は、なぜ迷い、悪を行なうのか、どうしたら愚かで、苦しく悲しい生き方から脱出できるのかという、切実な問いをもって、大乗仏教の深層心理学ともいうべき唯識を学び始めたのは、もう二十年以上前である。そして、みごとに答えを与えられたという思いから、これはぜひ多くの人と分かち合わなければならぬという、誰から課せられたわけでもない義務感のようなものを感じて、唯識について語り始めてからも十年以上経った。時は激流のように流れているという感慨がある。

本書は、私の唯識に関する最初の本である。お陰さまで刷りを重ねてきたが、今回、最新の拙著「大乗仏教の深層心理学——撰大乘論を読む」(晉土社)の刊行に合わせて、装いを新たにしていただけになった。

この間、八年が経っているが、専門家でない方に唯識の現代的意味を紹介する書としては、いまだに古くなっていないと思う。そう言っていると思うのは、私の知るかぎりでも東京都内のいくつもの書店で、

本書はこの八年あまり切れることなく棚に置き続けていただいていることだ。

また、NHKのディレクターの方が本書を読んで下さったのがきっかけで、一九九七年秋から九八年春にかけて、戦前戦後を通じて初めてという唯識についてのラジオ講義をさせていただいた（唯識のすずめ——仏教の深層心理学入門）NHKライブラリー、はそれを元にしたものである。そこで、私はあえて「唯識は二十世紀の常識である」と主張した。

こうしたことは、直接にはもちろん私事を述べているわけだが、実はただ私事ではないと思っている。二十年前、あるいは八年前にも、それほどはつきり気づいていなかったことだが、唯識の意味を発見するということは、日本人にとって（人類的意味についてはここでは置くとしても）決定的に重要なことだと思っただけである。

本文で詳しく述べたように、唯識のもっとも重要なポイントは、私は私だけで存在するのではない、すべてのものとながつており、果てしなくつながって全宇宙と一つなのだということへの目覚めを、きわめて説得力のある論理によって促しているところにある。現代風に言い換えれば、唯識は宇宙意識の心理学である、あるいは硬直した自我意識から宇宙意識への変容の心理学であると言ってもいい。そこには、特定の宗教のワクを超え、日本、東洋というワクも超えた、人類的な普遍性があると思う。

そういうものが、日本には奇しくもすでに白鳳・天平の時代に、遣唐使の学僧たちによってもたらされている。以来、千三百年以上、一般の人には知られることなく秘蔵されながら、しかし脈々と伝えられて

きた。

確かに唯識学そのものは、多くの人に知られることはなかったが、一貫して大乘仏教の基本的な理論という地位は保ってきた。つまり、ごく限られた、選ばれた学僧が、仏教の核にあるものとして大切に伝えてきたのだ。

そして唯識以後の日本の大乘仏教は、唯識の理論を直接語ることはなかったが、その中核とも言うべき、すべてのもの（若も物も）はつながり合って存在している、ご縁のものだという感覚については、日本人すべてが共有する（したろ）基本的な人生感・世界感（あえて「観」と言わない）になるところまで、広く伝え、深く育んだ。

しかもそれは、仏教絶対主義というかたちではなかった。かつて日本人の多くにとって、仏と神と天地自然とご先祖さまは、論理的にはありまいなまま、しかし感覚的には確かな一つのものとして実感された。「自分を超える大いなる何ものか」だったのではないだろうか。そして、そうした大いなるものと自分との、しっかりとしたつながりの感覚が、日本人の精神性・倫理性を支えていたのではないかということに、私は最近になって改めて気づいたのである（拙稿「コスモロジーの創出——ニヒリズムの克服に向けて」『季刊仏教』第四五号、法蔵館、参照）。

そうだとすると、こういうことになる。唯識は、神仏儒習合の中の、仏教の中の、唯識というかたちで、日本の精神的遺産の決定的に重要な核として、秘藏されながら、伝えられてきたわけである。そして今、

日本のあらゆる領域で精神性・倫理性が崩壊しつつある中で、唯識の持っていた意味がはつきりと論理的に解き明かされようとしている。

言い換えると、かつてすべてのものつなかりの感覚によって支えられてきた日本人の心が、明治維新と敗戦を経て、行き過ぎた近代的な分析・分離の論理によって解体されようとしている。そうした精神の危機の時代に、全宇宙的なつなかりの論理である唯識が、日本人がもう一度共有すべき精神的遺産として読み直されようとしているのではないだろうか。

今、日本人には、浅薄な近代化の欠陥を自覚し、唯識の普遍・妥当性ある全宇宙的なつなかりの論理を再発見し、それを通して日本仏教の意味を再発見し、さらにそれによって神仏儒習合という伝統の意味を再発見することが緊急に必要なのではないか。それなしには、決して排他的でない、正当な意味での日本人としてのアイデンティティを確立することはできないだろう。そして、個人と同じように、アイデンティティを確立できない根無し草の民族は、不安で、不安定で、多くの失敗を繰り返し、もしかすると自他もろともに崩壊に到るかもしれない。

大げさに言うつもりはないが、私が（もちろん私だけではない）唯識を読み直していることは、ただ個人的なことではなく、そうした日本全体の精神性に関わる出来事の重要な一部なのではないかという気がしてならない。そして振り返って見ると、本書はそうした再発見の出発点であり、装いを新たにまた広く読者の目にとまることには、新しい意味もあるのではないかと思う。

最後に、本書も含め私の主な著作をこの十年近く一貫して出版して下さいる青土社の清水康雄社長が、突然のように逝去されたことは、それもまた宇宙の中の出来事であり、やがて自分にも起こることはいえ、大きな悲しみであった。記して、心よりの哀悼の意と年来のご理解への感謝の想いとを表明したい。

一九九九年三月

岡野守也

唯識の心理学
新装版

1999年4月20日 第1刷印刷

1999年4月26日 第1刷発行

ISBN4-7917-5712-2

著者——岡野守也

発行者——清水一人

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町1-29 市瀬ビル 〒101-0051

(電話) 3291-9831[編集] 3294-7829[営業]

(振替) 00190-7-192955

印刷所——三協美術印刷

製本所——小泉製本

装幀——戸田ツトム

Printed in Japan ©1999

岡野守也の本

大乘仏教の深層心理学 『撰大乘論』を読む
フロイド、ユング、アドラーの心理学を包括し、乗り越える
大乘仏教の教義「唯識」の体系的理論書「撰大乘論」。
顧みられることの少なかったこのテキストを
初めて本格的にわかりやすく読み解き、
「覚り」へと至るための理論や瞑想法を明快に提示する。

トランスパーソナル心理学

東洋の宗教と西洋の心理学を架橋し、
近代のパラダイムを根底から覆すトランスパーソナル心理学。
そのセラピーの実際を紹介するとともに、
現代アメリカの最先端を行くこの学問=思潮を
思想史の中に位置づける。

能と唯識

「菩薩の深層心理学」唯識が、
「人生は夢幻のごとし」をテーマとする能の成立に
大きく寄与したことを論証する画期的な試み。
代表的な能演目にあたりつつ唯識の基本的な教義を解説する
能の全く新しい観賞法。